3．キャリア形成と進路指導

丹　下　容　子

本校は中学校各学年２学級（計240人）、高等学校各学年３学級(計360人）という小規模校である。１学年当たりの学級数が少ないため、文系・理系やコース制のクラス編成にすることは難しい。そのような状況で生徒一人一人の進路希望に対応するために、高等学校の上級学年ではさまざまな選択科目が設定されている。したがって、学級そのものは文系・理系のみならずさまざまな進路目標を持った40人になっており、加えて学力も非常に多様である。このような集団の進路指導は複雑で手間がかかるが、生徒たちは多様な進路希望を持つクラスメートからよい刺激を受け、それを指導する教員にとってもよい経験になっている。また、このようなクラス編成は、近年増加している文理融合型の学問分野や職業を目指す生徒たちにもメリットが大きいと思われる。

さて、本校における進路指導は６年間通じて実施される総合的学習「総合人間科」に負うところが大きい。特に、中学１年生と高校３年生は「生き方を考える」というテーマの下で、実際に自分の進路について考え、フィールドワークや文献調査をしていく過程で進路観・職業観が形成されていく。中学２年生・高校１年生は「生命と環境」、中学３年生・高校２年生は「国際理解・人権・平和」という大テーマに基づいて１年間個人研究やグループ研究を行い、それぞれ論文にまとめて発表している。その時に自分で選んだテーマが進路希望に影響し、実際にそれに関連した分野に進学または就職する生徒も少なからずいる。その一方で、あるテーマを追求した結果、その分野は自分に向いていないということがわかったり、別の分野に興味を持つようになったりする生徒もいる。このように、「総合人間科」は生徒たちの進路決定において大きな役割を果たしている。

しかし、「総合人間科」が担っている部分は進路指導の理念的・観念的な部分であり、実際の進路指導にはさらに具体的な道具立てが必要である。道具だけで理念の欠けた進路指導は無味乾燥であるが、理念だけで道具のない進路指導も画餅に帰する恐れがある。その両輪がそろった理想的な進路指導が展開されれば生徒たちのキャリア形成に大いに貢献することができるはずである。キャリアデザインとは「個人の現在から将来のキャリア生活において満足感、納得感、自己効力感を高めるために現実と自己概念の統合を図り、自分なりのシナリオに落としていく作業」(リクルート「Works35号」より引用）と定義されている。現実と自己概念の統合をするということは、すなわち進路目標と自分の現状との距離を客観的に測る力を身につけさせることであり、まさしく日頃から本校の進路指導が目指していることと一致する。「自己」を知るということは、まず平素の学習習慣を身につけさせることであろう。毎日の学習がしっかりなされて初めて自分の能力や適性を知ることができる。これは担任や教科担当者からの指導が大いに必要とされる部分である。また、「現実」を知るということは、進路指導においては自分の目標とする学問や職業に関する情報を得ることである。ここには総合人間科が大きく関与している。つまり、キャリア形成に貢献できる理想的な進路指導は、平素からの着実な学習習慣と総合人間科のどちらが欠けても実現できない。つまり、学習習慣に裏打ちされた「総合人間科」はすばらしい威力を発揮し、総合人間科を通して見出した進路目標に向かってさらに学習に身が入るという相乗効果をもたらしてくれるのである。そこで、今年度は、学習習慣を確立させるために特に重要な学年だと考えられる高校１年生を対象に、「総合人間科」以外の部分でどのような進路指導ができるか、具体的な道具立てを案出することにした。

本校は併設型中高一貫校であり、中学校からの２学級分80名はそのまま進学するが、高校１年生の時点で新たに１学級分40名が入学してくる。このような状況の高校１年生の目標は２つあると考えられる。１つは、附属中学校からの進学者の中だるみ状態をいかに打破するか、もう１つは新たに入学した40名をいかに本校の教育課程・進路指導方針に適応させるか、ということである。ここでもやはり、まず自分を知るためにすべての教科・科目を継続的にしっかり学習させることが最も重要であると思われる。前述したように、本校は文理制・コース制はとらず、高校２・３年生の選択

科目で対応している。したがって、高校１年生が自らの進路に直面せざるを得なくなるのは11月初旬の選択科目決定の時期である。そこで、今年度は「納得のいく選択科目決定」を大きな目標とし、平素からの継続的な学習を柱に、ホームルームの時間を使った進路指導を展開した。その際の道具立ては「合同ＬＴ」と「進路適性検査」である。

今年度の実施状況は次の通りである：

４月10日（火）合同ＬＴ（オリエンテーション。継続的な学習の必要性を呼びかける。）

６月14日（木）進路希望調査（自分の進路希望について考えさせる。）

７月12日（木）合同ＬＴ（簡単な大学入試制度の説明。夏休み後の進路適性検査、科目選択の予告。科目選択のためには夏休みも継続的な学習が必要であることを自覚させる。）

９月13日（木）合同ＬＴ（大学入試科目の説明。全員に入試科目冊子を配布し、各自の進路希望に応じた必要な科目を調べさせる。）

９月27日（木）進路適性検査（学級ＬＴ）

10月11日（木）進路適性検査結果解説会（合同ＬＴ）

11月１日（木）選択科目説明会（合同ＬＴ）

ここで、本年度の進路適性検査について触れておきたい。以前から毎年７月または９月に高校１年生全員を対象に進路適性検査を実施してきた。しかし、検査結果を生徒に配布するだけで、格段の指導は行われていなかった。毎年行われている道具としての進路適性検査を、これも毎年行われている科目選択決定に利用しないのはもったいない。進路適性検査は、うまく使えば、上述したキャリアデザインにおける「現実と自己概念の統合」に大きな効果を発揮してくれるはずである。現在使用している進路適性検査が生かされていない最も大きな原因は、担任による検査結果配布後のフォローが不十分なことである。その理由は：

理由①　検査結果を分析・説明するだけの知識が担任にない。

理由②　検査の受けっぱなしを防ぐ「自己理解ノート」というサブノートが同時に配布されるが、それに書き込ませたり、提出させたり、点検・フィードバックをする余裕が担任にない。

理由③　７月実施の場合はすぐ夏休み、９月実施の場合はすぐ学校祭という日程で行われていたので、担任が検査結果をもとに生徒と面談する時間がない。

理由④　検査の中の理系的な能力テスト問題に答えられると理系適性度が高くなりやすく、生徒の適性を正確に反映していないように思われる。これは担任の指導の及ばない部分である。

担任は全員が進路適性分析の専門家であるはずもなく、理由①②は担任の責めに帰するわけにはいかない。むしろ、この部分は専門家に任せることで解決できるだろう。理由③は学校祭の直後のLT（今年は９月27日（木））に検査を実施することで解決できそうだが、検査結果の返却が科目選択説明会に十分間に合う日程でなければならない。年度当初は科目選択説明会は10月18日（木）に設定されていたので、検査実施日との間は３週間ということになる。さらに、検査結果をもとに担任が生徒と面談する時間がほしいので、実施から約２週間でデータ処理・結果返却をしてくれる検査が理想的である。理由④は検査形式の問題なので、現在使っている検査とは異なる形式のものを探してみることにした。

今年度新たに採用した進路適性検査は、106職種の第一線で実際に「満足して」働いている人と94学問の分野で実際に「満足して」学んでいる人、合わせて２万人の回答結果を基に採取した価値観・興味・志向のデータを職種別・学問別にデータベース化し、受検する生徒の結果とのマッチングによって生徒の職種適合度・学問適合度をランキングするものである。したがって興味・関心を問う設問で構成されており、能力テスト的な要素は一切ない。能力を問う検査問題が全くないというのが多少不安でもあったが、本校のように学力も進路目標も多様な生徒集団にはむしろ有効であるかもしれないと考え、この検査を採用することにした。また、検査結果とともに配布される付録の仕事・学問カタログが充実しており、高校３年生までの使用に十分耐え得るものであることも評価した。さらに採用の決め手になったのは専門家による検査結果の解説が可能であるということであった。これで上述した不十分な事後指導の原因をほとんど解決することができる。今年度はかなり無理な日程ではあったが、検査実施後２週間で結果を出してもらい、10月11日（木）に解説会を開催した。このように無理をしたのは翌週18日（木）に予定されていた選択科目説明会との間に少なくとも１週間は学級担任による指導期間を確保したかったからである。が、結果的に選択科目説明会は11月１日（木）に延期されたので、３週間という十分な担任による指導期間に恵まれたことは生徒たちにとって非常に幸運であった。

検査結果の解説会の最後に全員に感想を書かせた。そのうちの一部をここに示す：

・検査の内容はおもしろく楽しかった。
・なりたい職業が決まっていたが、それ以外の職業に目を向けることができ視野が広がった。
・先生と違った見方で話してくれたので新しく「そうか」と思える部分が多くてよかった。
・進路についてまだ何も知らなくて何をしたらいいのかわからない私たちの大きな手助けとなってくれたと思う。参考にしながら今後のことを考えていきたい。
・検査の結果で、興味のもてそうな職業がたくさんあった。自分の気づかない可能性が結構たあるんだなと思った。
・将来についていろいろ悩むのは普通なんだと少し安心したのと同時に、何に対してでも前向きにがんばろうと思った。
・今まで将来のことを考えなきゃいけないと思っていたけど、なんだかんだ言って避けて通ってきた気がする。今日の話はとてもわかりやすく、自分を見つめてみようと思った。
・たくさんの人に会って話を聞いて下さいという言葉を聞いて、私にはそういう機会がたくさんあったと思った。総合人間科は自分のやりたいこと、将来の自分の職業を探すのに絶好のチャンスだと思う。
・今自分がなりたい職業があるんだけど、すごくなりたいわけでもないし、大人になってその職に就いたら自分に合うのかどうかも不安だった。でも、今日自分には他にも満足できそうな職業がたくさんあると知って楽になった。これからいろいろな人と話したり、いろいろなことに挑戦したりして自分に合うことを見つけたいと思う。
・自分で将来のことを考えるのが楽しくなってきた。
・向いていなくてもその分野が大好きなら何か発見したり創造したりする確率は少なくないと思う。むしろ興味のなかったものになってやる、という不思議な感情が起こった。
・今まで進みたい方向が漠然と決まっているだけだったのが、光で照らし出されて見えてきた気がする。自分のやりたいことをやって満足のいく毎日を送りたいという思いが強まった。

この時点ですでにこちらが期待していたような感想が見られる。「先生」以外の人から解説をしてもらうことの利点、自分の気づかない可能性の存在、「総合人間科」との関連性、などである。

その後、平成14年１月末に高校生121名を対象に次のようなアンケートを実施した（欠席などによる無回答があるため合計は121名にならない設問もある）。

昨年９月27日に実施し、10月11日に解説会をしたR-CAPという進路適性検査をおぼえていますか。これについてのあなたの感想を知りたいので、各設問の答えのうち、あなたの気持ちに最も近いものを１つ選んで○を付けて下さい。

問１　R-CAPを受けた感想はどうですか。
1　受けなければよかった
2　あまりよくなかった　　3　普通
4　よかった　　5　とてもよかった

問２　結果は意外でしたか。
1　すごく意外だった
2　意外なものもあった　　3　普通
4　ほぼ予想通りだった
5　自分に興味のある職業・学問ばかりだった

問３　結果の上位に入っている学問や仕事の中身を付録のカタログで調べましたか。
1　全く調べなかった　　2　少しは調べた
3　興味のあるものは調べた
4　ほとんど調べた　　5　全部調べた

問４　検査を受ける前より自分の進路を本などで調べるようになりましたか。
1　よくわからない　　2　まだわからない
3　変わらない　4　多少調べるようになった
5　すごく調べるようになった

問５　結果を誰かに言いましたか。
1　誰にも言っていない
2　友人だけに言った　3　親だけに言った
4　先生だけに言った　5　友人と親に言った
6　友人と先生に言った
7　親と先生に言った
8　友人にも親にも先生にも言った

問６　専門家に解説会をしてもらったことはよかったと思いますか。
1　必要ない
2　なくてもよいが、してもらえば聞きたい
3　解説会は必要だが、もっと内容を変えてほしい
4　自分に役立つ部分が少しはあったので解説会は必要だ
5　とてもためになったので解説会は必要だ

問７　R-CAPは高２の選択科目決定の参考になりましたか。
1　全く参考にならなかった
2　参考になった部分は少ない

3　R-CAPの結果に左右されたわけではないが、参考になった
4　自分の知らなかった学問・職業を知り、よく考えてきめることができた
5　ほぼ予想通りの結果だったので安心して科目を決めることができた

問8　R-CAPの結果はあなたの進路希望に影響しましたか
1　全然関係ない　2　わからない
3　R-CAPの結果のおかげで迷い始めた
4　R-CAPの結果によって自分が今までに考えていた進路希望を変更した
5　R-CAPの結果によってすでに決めていた進路希望に自信が持てた

この集計結果から次のようなことがわかる。

①問1の回答4と5を合わせると66.1%が「よかった」と答えており、3を含めると94.8%が少なくとも否定的な見方はしていない。

②問2の回答1と2を合わせると71.3%が自分にとって意外な結果だったようである。これは「自分では自覚できない適性（他者から見える適性）に気づかせる」というこの検査のコンセプトにまさにぴったり当てはまっている。

③問3から、ほとんどの生徒が付録の仕事・学問カタログを活用したことがわかる。

④問4の回答4と5を合わせると、少なくとも38.6%の生徒が自分の将来の進路について以前よりも積極的に考えるようになったと思われる。3と答えた生徒が以前からどのような進路意識を持っているかにもよるが、このあたりの層の生徒を動かすことが今後の課題であろう。

⑤問5から、75%の生徒が親に話していることがわかる。親にも言いやすい検査形式・検査内容だったということであろうか。

⑥問6の回答2・4・5を合わせると80.2%の生徒が解説会の意義を認めていることがわかる。

⑦問7の回答3を選んだ42.3%や問8で4と回答した生徒が一人もいなかったことが象徴しているように、多くの生徒は進路適性検査の結果を参考にしつつ、最終的には自分でよく考えて進路決定している。これは検査後の担任指導が十分生かされた結果だと思う。

⑧問7の回答1・2や問8の回答1・3を選んだ生徒のほとんどが問1で「よかった」と答えている。つまり、彼らはこの検査を否定的に見ているわけではなく、結果的に検査結果とは違う進路を選択したということを言いたかったのであろう。

⑨アンケートの最後に感想があれば書くように指示したところ数人から回答があった。検査実施から4ヶ月経過した今でも好意的な意見ばかりであった。一部をここに示す。

・全然考えてみたことがないもの（職業・学問）があってそんな道もあるんだなと思った。
・職業の種類についてもっと知りたいと思った。ほんとうに自分に向いている仕事は何なのだろうと思った。
・自分がなりたい職種があって少し安心したが、絶対になりたくない職種もあり複雑な心境。
・すごく細かく分析してあってわかりやすかった。
・就きたい職業にいっそう興味がもてるようになった。
・将来の進路について参考になったと思う。でも本当に自分に適しているかどうかは確かではないのでよく考えて進路を決めたい。

アンケート集計結果（数字は人数）

回答番号 / 設問	1	2	3	4	5	6	7	8
問1	2	4	33	39	37			
問2	22	60	20	8	5			
問3	8	31	46	19	10			
問4	2	19	49	40	4			
問5	6	20	5	0	65	2	0	14
問6	11	36	8	30	23			
問7	21	28	47	9	6			
問8	25	53	12	0	16			

・知らなかった職業、自分には向いていないと思っていた職業が上位に入っていたので、いろんな分野に目を向けていちばん自分に合う職業に就きたい。
・解説会の時間はすごく有意義だった。「将来」という大きなテーマについて真剣に考えることができた時間だった。
・変わった学問や仕事がたくさんあるということを知ることができてよかった。
・自分を見つめ直すチャンスでした。
・検査結果によって、自分の希望していた職業に就きたいという気持ちがもっと大きくなった。

以上のように肯定的な意見がほとんどで、今回の実施の意義は大きかったと思われる。また、生徒たちの感想をまとめると「職業観・学問観が広がった」「自分自身を見つめ直す機会となった」というものになるだろう。自分に向いていないと思っていた領域に興味を持ち始めた生徒も多数存在しており、これでこの進路適性検査の本来の目的はほぼ達成されたと言える。解説会にも意義を見出す生徒が多く、進路適性検査には必ずこのような事後指導が必要であると思われる。

リクルートが2000年２月に全国の高校生1000人に対して「高校生の職種イメージに関する調査」を実施したところ、次のような結果が出た。

①なりたい職業

【男子】		【女子】	
１位	国家公務員	１位	フライトアテンダント
２位	地方公務員	２位	心理カウンセラー
３位	ゲームクリエーター	３位	医師
４位	プログラマー		看護婦
	高校教諭	５位	保育士
	医師		

②なりたくない職業

【男子】		【女子】	
１位	政治家	１位	政治家
２位	営業	２位	営業
３位	とび工		中学校教諭
４位	自衛官		医師
５位	高校教諭		看護婦

「なりたい」理由の代表的な回答は「安定していそう」「かっこいい」、「なりたくない」理由は「型にはまった仕事はしたくない」「つまらない人物になりそう」「しんどそう」というもので、その仕事の一面しか見ていなかったり、テレビドラマの登場人物が演じるステレオタイプなものを一般化させて見ている結果だとリクルートは分析している。高校生の職種に対する理解がいかに浅いか、そしてそれに起因する誤解がいかに多いかということである。したがって、高校１年生の時から職業に対する理解を深める手だてをすることはキャリア形成に大きな役割を果たすだろうと思われる。

今回の進路適性検査とそれに伴う事前指導（合同ＬＴ）・事後指導（解説会・担任指導）はそれなりに手応えがあった。生徒たちの感想からも肯定的に受けとめてもらえたことがよくわかる。したがって、来年度以降も本年度の進路指導関係スケジュールに倣って実施していくつもりである。そして、高校１年生での指導を２年生に、さらには３年生にどのように発展させていくかが今後の課題の１つである。これからも進路指導上のサポートやアドバイスを生徒に提供し、進路目標と自分の現状との距離を客観的に測ることができる力を養成していきたい。そして、これが平素の学習習慣と「総合人間科」に支えられれば、自ら進路目標を見出し、それに向かって努力する生徒が育っていくはずである。　（文責：丹下容子）